

東尋坊などでは私なんか吹き飛ばされそうだったりして、旅っていいですね。若いうちだけです。皆さんも計画をたて、どんおゆきなさい。会社も休みがふえた事で少し色々な所へ行き、自分の知識を高め、人間を大きくしてください。
旅っていいですね。

山靴のうた (4)

マグ 後藤 隆徳

―岩・雪・アルプス―

北岳バットレスDガリー大滝、四尾根下部フラニケ、四尾根登攀

北岳バットレスは北岳のその東面に日本にも数少ないバットレスを形成している。本邦第2の高峰北岳（三千百九十二米）の頂稜から大樺沢に一気に五〇〇米の落差を誇りその各稜が登攀対象となるのであるが、とりわけ第一尾根、中央稜、第四尾根は岩も硬くすばらしい登攀が満喫できる。

私とパートナー稲木英一は汗を流しながら大樺沢を登る。二俣を過ぎD下沢に入りDガリー大滝めざす。この前、と云っても三ヶ月前だがこの辺はまだ残雪が多く雪の急斜面であったのに今日はその荒々しい岩壁とは対象的にお花畑が美しい。Dガリー大滝着九時半。天候はまずまず。十時Iとアンザイレンして私のトップで登りだす。大滝は左側を登るのであるが取付からハング気味であまり気分はよろしくない。2P目は草付でこれ又あまりスッキリとはしない。しかし、天気は安定しているし体の調子も良好

の様だ。のんびり行こう。大滝を二P^{ピッチ}八〇米で終る。すると緩傾斜の草付となるのでIを引き上げコンテナアスで下部フラニケの取付に急ぐ。下部ラニケには一パーティー取付いており三〇分程待たされ草付の上に横になっていたら眠くなってしまった。先行パーティーのセカンドはあまり登攀が上手とは云えず下で見えてじれつたい位だ。Iと二人で下からアドバンスするがあまり効果は無さそうである。

十一時いよいよ私達の番だ。

三P目はまず三〇米のスラグからであるが、ここから高度感がグッと出るし抜けてバンドに立つ所が悪い様である。「頼むゾ」と、Iに声を掛けて登りだす。先程のセカンドが苦労していた所は指先に僅に掛けて登りだす。先程のセカンドが苦労していた所と思いい切りの良さだ。二〇センチのバンドに立ちNを上げる。Iは「どうと云う所ではないな」などと言いながら上ってきた。四P目は凹角とハングで三十五米だ。今度はNがトップで行きたいとの事。トップは彼に譲る。赤と青の九ミリの二本のザイルは軽快に伸る。途中のハングだろうか「悪いな」などと風に乗った。彼の声が頭の上でする。「登って良いゾ」の聲が有ったので「いくぞ」といって私も登りだす。ハングの所でアプミが終り少々登りにくかった。この頃ガスがぼちぼち上ってきて、陽光もどこかに消えうせた。五P目はやはりハングと凹角の四〇米だ。私がトップで行く。ハングで少し体力を消耗し、いささか疲れが出てきた。昨夜は広河原のロッジの階段の下で寝たので休まらなかったのだから「危険だな」とつぶやく。しかしそれが山なのだ。危険でも登る。畏はどこかに口を広げてまっているのか。―危険を甘受し

なければ真のアルピニズムは存在しない。危険を冒すのでなければ、困難なピッチを突破し、目がくらみそうな永壁を登り、大岩壁を登攀する楽しみはどこにあるのだろうか？スリップしたら鳥の様に翼をはばたいて飛び立ち虚空からのがれることが出来るのだとすれば、楽しさはないはずなのだ意識していようが、いまいが、アルピニストは危険を冒すことが好きな人種である。もつともこれは計算された賭である。なぜならば真の楽しみは危険を堪え忍ぶことでなくこれを支配することにあるのだから。しかし、豊富な経験と最良の準備さえあれば登山の危険は完全にのぞくことが出来るなどと思ひ込むことは空中楼阁を描くのと同じ。アルピニズムは、明らかに危険なスポーツである。——ルネ・ドメゾン。ハングを越えると三〇米のフェースが私達を待っていた。別に特長の無い様なフェースであるが傾斜が強くルートファイティングがむずかしそうだ。

Iが慎重に登り出す。ルートが右に左にいくのでIはザイルが流れず苦しそうだ。「ザイルアップ」が怒鳴る。岩壁で大声を出す以外と落着くものである。彼はむずかしいフェースを越えた。私も後に続く足の下をのぞくと虚空へ吸いこまれそう。こういう悪い所はあまりキョロ／＼せず登る事に専念することだ。七P目は一〇センチ程のバンドのトラバース。これを終れば四尾根に出る。一〇米先の真中がむずかしく腹の出ている奴にはちよつとイヤな所だろう。私はこれを越し四尾根に出る。四尾根に出た所で昼食にする。喉がカラカラだ。四尾根での最終の十一P目を登っている所で雨が降り出した。すぐ左のDガリー奥壁では悪戦苦闘している。「がんばれよ」とコールして私達はお花畑の中を稜

線に急いだ。北岳頂上着十五時半。長い登攀だった。私とIは疲れた体をひきづって下山にかかった。今夜は大樺沢でビバークだ。

北穂高岳滝谷ドーム正面壁登攀

数多い滝谷の岩壁の中でも真に壁を感じさせるドーム正面壁。私の長年の夢はこの日実現した。昨夜は南稜で歌い・飲み・騒ぎ過ぎた為か朝四時に起きたが、まだ頭がボーッとしていた。まあそんなのも今だけで滝谷の風にも当ればシャキッとするだろう。パートナーの稲木・西堀もあまり爽やかな顔はしていない。簡単な朝食をとり四時半南稜を出発。第一尾根、四尾根に行くパーティーと別れ、我々は取付に急ぐ。まだ滝谷は井戸の底の様に暗い。取付で夜明けを待つ。蓑を吸う。冷たい風が気持よく気持も落着いているので今日も良い登攀が出来るであろう。

五時四十分私のトップでアタック。一P目四〇米は垂直な凹角から始まる。下部二〇米はおおまかなホールド・スタンスであったが登るにつれて壁の角度は増し、凹角も徐々にせまくなり最後には右の壁に打ち残してあった。ピトンにアブミをかけ壁の登攀となる。何か体が非常に重く感じられてきた。今日で入山四日目なので疲れが出たのだろうか？肩で呼吸をしなければ苦しい。今日は三人なので時間も掛るだろう。それだけ休む時間も長くなるので少しは楽になるか。二P目は草付バンドをコンテナアスで登り三P目四〇米の凹角にNのトップで入る。今日も良い天気である。過去三年間滝谷に通っているが、こんな良い天気には恵まれた

のは初ゆてである。四P目はこのルートの関門である。私のトップで登り出す。テラスからいきなり人工登攀でアブミの掛かえで登り出す。登るにつれて壁は除々に垂直になって行く様な気がする。時々半分位しかリスに入っていないハーケンが有るが静かに静かに登り、すばやくその上のピトンにカラビナを入れて、ホットする。下でぼんぼんとNがジーと見ている。高度感はずばらしい。ぼちぼちと滝谷にもクライユエーやってきたらしく各壁に元気の良い掛声が響く。

三〇米登り不安定に石がつまった洞穴状のテラスに着く。三人を上げて五P目も私のトップで登り出す。でだしが少々悪いアブミトラパスが終えるとフリーで凹角に入る。二〇米を快適に登り登攀終了点のドームの頭に出る。IとNを上げドームの頭にて記念写真を取る。まだ八時四十分だ。三人にしては仲々良いタイムだ。天気は相変らず気持良く晴れていた。

前徳高岳東壁Dフェイス田山ルート登攀

雨はすでに上高地から降っていた。入山の時雨が降っていると、いうことは実にイヤなものだ。雨にけむる穂高も気韻であるのだ。奥又白池畔にツェルトを張り明日の天気を心配する。翌日は雨が少し降っていたがかわまわず四峰に向ったものの取付でどしゃぶりになったので登攀は断念し、ふてくさって帰幕する。明日少しでも降ったら帰るとSに伝え雨にべとべとにぬれたシュラフにもぐる。それでも夜になったら雨もやみ曇もちぎれ、星が輝き始めた

ではないか。山で天候に恵まれることは幸せな事だ。これ以上のぜい沢はない。山で若い命が毎年多く消えて行くのもほとんどが天候である。

翌日、私とSは三時に起床した。外はまばゆいばかりの星である。四時池畔を出てB沢に向う。B沢の都合にいたがまだ暗く頭上にはオリオン座が輝いている。B沢は暗くては少々悪いので夜明けを待つ。常念の頭が明るくなった頃再び出発してDフェイス基部着六時。Dフェイスも前から登りたいと思っていた壁であつたがようやく今日実現するかもしれない。終ってみないと解らないがDフェイスは悪いぞ、とパートナーのSにもうながす。私のトップで取付開始六時十分。取付はB沢のどんづまりから草付のバンドを三〇米右斜上するとDフェイスを特徴づける二〇米のストラブに出る。このストラブは全く快適である。B沢をぼちぼち下からクライマーが登ってきたので落石は禁物である。私のトップで一P三〇米二P目スラグ三〇米とのばしテラスで軽く休憩水がうまい。三P目はこの壁最悪のピッチだがまだ若いSがトップで行くというので行かせる。

Sが三P目を開始して頭上のコブの上に消えた時ちようど今日Dフェイス第二番目のパーティーが取付く所であつた。トップのSは「Gさん悪い悪い」と、ぼやいている。私はここから見た範囲ではそう悪く見えないので「早く登れ」と、どなる。Sは悪戦苦闘してどうにか洞穴テラスについたらしい。「登って良いよ」とコールしてきた。取付からハーケン連打のアブミの掛かえで私はおもむろに一本目のハーケンに乗った時、落石の音とともに下の方でズシューンというものすごい音がB沢に響いた。私ははっと